

序章 水循環とわたしたち

■ 水循環とは

みどり豊かな山々で育まれた清らかな水は、ひとすじの流れから豊かな川の流れとなり、海へと注ぎます。そして、やがて海から蒸発し、降水となって森のみどりを潤しながら再び大地からしみ出します。その自然の流れの中で、水は大地を潤し、たくさんの生命を育み、彩り豊かな自然環境や景観をつくりだします。

この清らかで豊かな水は、台所やお風呂などの生活用水や、農業、工業などの産業用水として利用され、川や湧水などの水辺は、憩いや安らぎ、遊び場として活用されています。

私たちは、日々の暮らしのさまざまな場面で、このような水の循環による恩恵を授かっています。水は、豊かな自然を育みながら、人々の生活や社会活動を支え、文化を育てる役割を担っています。



図序-1 水循環の概念図

■ 八王子の水循環

私たちが暮らす八王子は、山地と丘陵地に囲まれた低地が盆地状の地形を呈し、山から流れ出た河川や、丘陵の谷戸や崖下で湧き出した湧水が低地に流れ出し、水が豊かという特徴があります。

しかし、高度経済成長期以降、急激な人口増加と都市化が進み、自然の営みと私たちの暮らしとの間で保たれていた水循環のバランスが崩れ、特に浅川をはじめとした河川の水質は悪化しました。市は工場等の公害対策に取り組み、平成9年には「八王子市生活排水対策推進計画」を策定し、公共下水道整備や市民と協働した生活排水対策に取り組んできました。平成19年度には公共下水道（污水）整備が完了したことにより、平成20年度には測定河川8河川すべてにおいてBOD(生物化学的酸素要求量)の環境基準が達成されるようになりました。

一方で、高度経済成長期以降の都市化や生活水準の向上は、生活用水や工業用水の需要を増やすとともに、雨水の不浸透域を広げ、農林業をめぐる厳しい経営環境は、森林の荒廃や農地の減少をもたらしました。その結果、地下水のかん養機能が弱り、平常時には湧水の枯渇や河川で瀬切れが目立つようになりました。

さらに近年では、地球温暖化による豪雨傾向や渇水傾向が想定される中、豪雨時の急激な河川の増水や内水はん濫などの都市型水害の懸念もされています。

八王子の水の記憶

八王子市はかつて織物の町として栄え、浅川では織物の布さらしが行われていました。京王八王子駅がある明神町には、浅川からの船着き場であった大明神池が存在していました。今は、かすかな水の記憶として写真に記録されているにすぎません。



大正の頃の大明神池

出典：「セピア色の風景一写真で見る明治・大正・昭和の八王子」八王子市郷土資料館（1998）



浅川の瀬での布さらし（昭和初期）

出典：「八王子中野町わが街」清水正之氏

■ 水循環計画の策定及び改定

私たちは今こそ、みどりと水の豊かな八王子に本来備わっていた水循環機能を再生し、恵まれた環境を次世代に引き継ぐため、自然と共生するまちづくりに向けてしっかりと歩みを進めなければなりません。市は水循環機能の低下がもたらしている水環境の課題へ対応するため、これまでの水に関する施策を水循環系の視点からとらえ直し、まちづくりを通じて健全な水循環系の再生に取り組む『八王子市水循環計画』を策定し、平成 22 年度から施策を推進してきました。

平成 26 年度において、計画が中間期に達したことから、これまでの取組を総括し、河川の水量確保、浅川の水辺活用、湧水ネックレス構想の実現を課題として見直しを行い、環境審議会の答申及び市民意見を踏まえて改定を行いました。

■ 改定における施策の展開

- ① 8つの湧水保全と「湧水めぐりの道」で水のまちづくりを展開（湧水ネックレス構想）
- ② 拠点とネットワークで浅川の水辺活用を推進
- ③ 浅川の水量回復に向け流域で連携した取組を展開
- ④ 雨水貯留浸透施策の充実と雨水利用の推進
- ⑤ 市民と協働したモニタリングの実施

健全な水循環系とは

平成 26 年 7 月に施行された水循環基本法において、「水循環とは、水が、蒸発、降下、流下又は浸透により、海域等に至る過程で、地表水、地下水として河川の流域を中心に循環すること」、「健全な水循環とは、人の活動及び環境保全に果たす水の機能が適切に保たれた状態での水循環をいう」と定義されました。